

5 境界型糖尿病患者の OGTT によらない早期発見のための検討

田中 正美・山田 幸男・後藤紀代美
落合 淳子・齋藤 愛子・佐藤紀代美
小林 夏江・岩原由美子

(財)新潟県保健衛生センター健康支援課

およそ半数の糖尿病患者は医療機関にいておらず、放置している人が多いのが現状だが、OGTTにかかる費用や時間、苦痛のため、実際に受診する人は精査の必要な人の10%に過ぎない。早期の糖尿病教育、指導の介入が、健康機関として重要な役割であると考え、OGTTを行わないで耐糖能障害者の早期発見ができないか検討した。結果、HbA1c6.1%以上空腹時血糖120mg/dl以上、随時血糖220mg/dl以上のいずれか一つ以上当てはまれば1部境界型糖尿病を含むが、大部分の糖尿病のスクリーニングができると考える。

HbA1c5.8%、空腹時血糖110mg/dl以上、随時血糖200mg/dl以上いずれか一つ以上当てはまれば、多くは境界型糖尿病、糖尿病であった。

HbA1c5.6%、空腹時血糖105mg/dl以上、随時血糖180mg/dl以上で糖尿病のリスクファクターを1つ以上持っていれば、境界型糖尿病可能性が大きいとも考えられた。糖尿病、境界型糖尿病の早期発見、進行予防がセンターでの大きな役割であると考え、今後、主に糖尿病での群では3回、境界型、糖尿病型の群では2回、大部分境界型糖尿病が含まれる群では正常型も一部含まれるのでリスクファクターを持っている人に1回コースで教育を実施していく予定である。また、これらの人々たちには、正確な診断とインスリン分泌能を知るためになるべくOGTTをすすめたい。

6 当院における外来糖尿病療養指導

渡辺 重雄・大島 貞子*・本宮みどり*
石黒 健一**

独立行政法人労働者健康福祉機構
燕労災病院薬剤部
同 看護部*
同 検査部**

【目的】外来でのインスリン使用状況の把握と、今後の課題を明らかにするために調査を実施した。

【方法】当院糖尿病外来インスリン使用患者約150名中、同意の得られた、自己注射を1年以上行っている69名を対象に行った。低血糖対策、シックデイ対策における認識の聞き取り調査と、インスリン練習器による手技確認を実施した。

【結果】手技確認で、単位設定の不備における70歳以上の高齢者の割合(62.5%)が高かった。低血糖値(70mg/mL)が認識(29.3%)されていなかった。

【考察】手技に関する年代別での比較では、70歳以上の高齢者の群で、単位の設定不備の割合が高かった。これは視力低下や正確な操作が出来ないなどの身体能力低下が考えられる。当院は高齢者の割合が高く、自己注射の可否を再評価する必要性を示唆するものとする。低血糖値(70mg/mL)に対する認識が誤っている割合が70歳以上の高齢者に高く、血糖測定器が効果的に使用されていない可能性が考えられた。

7 臨床使用における懸濁インスリン製剤の混和法に関する検討

川崎 恵美・柄沢 仁美・朝倉 俊成
影山 美穂・阿部 学・齋藤 幹央
影向 範昭

新潟薬科大学薬学部臨床薬学研究室

【目的】臨床での保管環境および混和法を用いて混和状態を評価し、適正な保管環境および混和法を検討した。

【対象・方法】6種類の懸濁インスリン製剤を対象とし、温度、姿勢を変えて保管後、3つの混和法

にて懸濁した。評価は、混和状態の目視判定および濁度測定にて実施。

【結果】20～24℃、水平、水平に転がした後上下に振る(R-T1法)の組み合わせが最も混ざりやすく、適正濃度に近かった。50MIX, 70MIXは混ざりにくく、適正濃度とのずれと濁度のばらつきが大きかった。

【考察】懸濁製剤は混和回数が少ないと結晶濃度に影響する。懸濁製剤を完全に懸濁するためには、使用中は低温保管は避け、冷たくなった場合は手のひらで20～24℃に温めて混和する、混和はR-T1法を用い、1セットごとに結晶の塊の有無を確認しながら2セット以上行い、結晶の塊がなくなるまで混和することが必要であると考えられる。

8 インスリン注入器のコアリング発生に関する検証

柄沢 仁美・川崎 恵美・朝倉 俊成
影山 美穂・阿部 学・齋藤 幹央
影向 範昭

新潟薬科大学薬学部臨床薬学研究室

【目的】ナノパスニードル(以下、MT33G)の針の後端は他のJIS A型注射針に比べ2～4G分太くなっている。そこで、他の注射針とコアリング発生状況において差がないかどうか検証する目的でコアリング試験を行った。

【対象・方法】MT33G及びBDマイクロファイブプラス31G×5mm Thin Wall(以下、BD31G)と2種の注入器との4通りの組み合わせにおいて、注入器への針の装着と5単位の排出を行う操作を30本の針で繰り返した。30回分の排出液とカートリッジ残液をろ過し、フィルター上に残留したゴム片の数を顕微鏡下で計測した。

【結果】どちらの注入器においてもBD31Gとの組み合わせの方が大量のゴム片を生じるケースが多かった。

【考察】MT33Gの針後端に施されたベント加工が太さの欠点をカバーし、BD31Gよりもコアリング発生状況で優位性をもたらしている可能性があ

ると考える。

9 インスリン非投与肥満2型糖尿病患者における血糖自己測定(SMBG)を用いた栄養教育が血糖コントロールに与える影響

長谷川美代・佐々木英夫***
小林 昌子・石月公美子・石川 裕子*
佐藤 卓**・松林 泰弘***
五十嵐智雄***・原 正雄***

新潟医療センター栄養科
同 看護部*
同 検査科**
同 糖尿病センター***

10 DPP-IV阻害薬(シタグリプチン)の臨床効果

高橋菜々子・濱崎真沙子・本間 悠子
齊藤 龍弥・八幡 和明*

厚生連長岡中央総合病院薬剤科
同 内科*

【目的】2型糖尿病患者に選択的DPP-IV阻害薬を使用し、使用6ヵ月までの臨床効果について検討した。

【調査期間】2010年3月～12月

【対象患者】24名(男性14名 女性10名)

【年齢】44～83歳(平均:63.1±10.4歳)

【罹病期間】3～30年

【結果】DPP-IV阻害薬投与によりHbA1c(JDS値)は平均で開始前8.2%,1ヵ月後7.6%,2ヵ月後7.2%,3ヵ月後6.8%,6ヵ月後6.9%と改善傾向を示した。HbA1c別にみると高い人でより改善がみられ、罹病期間別には改善傾向にあまり差がみられなかった。DPP-IV阻害薬における副作用はほとんどみられなかった。DPP-IV阻害薬開始後、併用薬では多くの症例でSU薬が減量されていた。体重にはほとんど変化がみられなかった。

【まとめ】DPP-IV阻害薬投与により想像以上にHbA1cが改善するという印象をもった。早期にHbA1cが低下し一旦改善が得られたものの